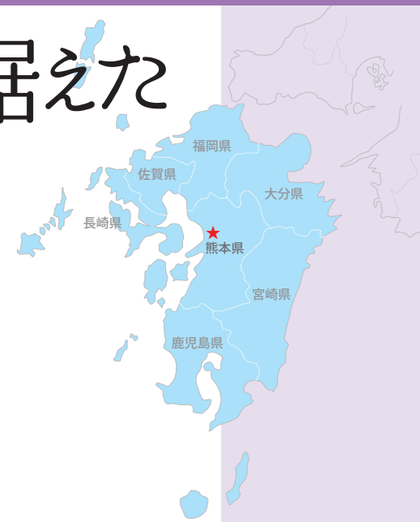
実践事例レポート2

熊本県立第二高等学校

生徒たちの未来を見据えた高校における総合的な学習の時間

高校での総合的な学習の時間と言えば、進路指導や受験対策が主であることが多い。しかし、そこに「探究的」「協同的」要素は含まれているだろうか。来年度からの新学習指導要領先行実施を控える高校で、総合的な学習の時間を「変える」取り組みを取材した。

取材：西尾真澄／撮影：西尾琢郎



8時前にはどの教室もこの状態。教室前方に掲げられた「沈黙と集中」が、「早朝学習」と「朝読書」のスローガンだ。基本的に、担任の先生は教室にいるだけで指示等はしない。

「知」のインプットで作られる下地

熊本二高の朝は「早朝学習」に始まる。「早朝」とは名ばかりではない。生徒たちは朝7時前から続々と登校し、まっすぐ教室へと向かい、自席に着いて、黙々と自らの課題に取り組むのだ。

早朝学習のための教材は、日々用意されている。日替わりで各教科担任が作成する、表裏1枚のプリントがそれだ。しかし、生徒たちはそのプリントを解き終えても集中力を切らさない。今の自分が必要としている、本当の意味での課題を探し出し、おのおの自主的な学習をスタートさせる。教室内には一言の私語もない。

早朝学習は1時間。続く「朝読書」が10分。朝読書の開始を告げる音楽が流れるや、生徒たちは速やかに本を取り出して読み始める。

本のジャンルに規定はない。彼らが読んでいる本は、情報処理、化学、古典、ミステリーと多種多様。感想文を書くためではなく、単純に本を読むという行為を楽しむ生徒たちは、早朝学習と合わせて大量の「知」をインプットしている。

「自主積極」を身に付けるために

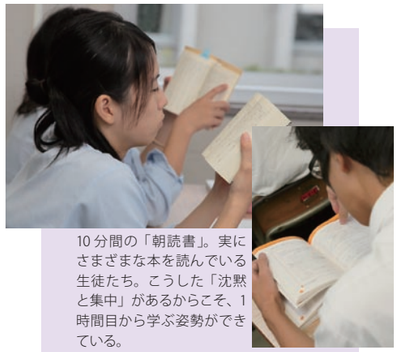
昨年度まで、熊本二高の総合的な学習の時間は、主に小論文指導で成り立っていた。これは主として受験対策としての指導である。1988年からスタートした「早朝学習」「朝読書」「小論文指導」は熊本二高の3本柱として知られ、事実、国公立大学現役合格者数（昨年度271名）は県内トップ、全国的に見ても1、2位を争う数字だという。

「そうした進学実績があるからこそ、現状から何かを変えることは、決して易しくはありません」

そう語るのは石井校長。

「しかし、新学習指導要領が導入される今ここで進化がなければ、進学実績も次第に勢いを失っていくでしょう。本校の生徒に一番足りないもの、それは校訓にもある『自主積極』です。受け身、指示待ちに陥りがちな生徒たちに、実社会で生きるための力を身に付けさせるにはどうすればいいのか。そこで、総合的な学習の時間、つまり小論文指導のテコ入れに踏み切ったのです」

「知」のインプットは豊富で、高評価を得られる小論文の書き方は理解している。しかし課題意識に薄く、確固たる自分の意見を持たず、自分の言葉で「知」をアウトプットすることは苦手。校長先生のお話から、そんな生徒たちの姿が見えてきた。



10分間の「朝読書」。実にさまざまな本を読んでいる生徒たち。こうした「沈黙と集中」があるからこそ、1時間目から学ぶ姿勢ができている。

石井博憲（いしい ひろのり）校長先生

課題は難問！協同で探究し解を探す

今年度から見直されることになった総合的な学習の時間。1学期を終えた段階でどう変わりつつあるのか、早速授業を拝見した。

1年5組の総合的な学習の時間。担任である原口先生が次のように指示し、授業が始まる。

「今日は、これまでに調べてまとめたことを班ごとに発表してもらいます。今か

熊本県立第二高等学校

熊本市の東に位置する熊本二高。普通科に加え理数科、県内唯一の美術科を有し、文部科学省からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け研究開発に努めている。自主積極・廉恥自尊・礼節協調を胸に、これからの日本を担う人材の育成に邁進する。生徒数1,230名、石井博憲（いしい・ひろのり）校長。

〒862-0901 熊本県熊本市東町3丁目13-1
TEL:096-368-4125
http://www.higo.ed.jp/sh/dainish/

実践事例レポート2

ら15分で、模造紙の仕上げと、どんな発表をするのか決めてください」

班のリーダーがクジ引きで発表順を決めると、原口先生はその順番と発表のポイントを板書する。発表時間は1班あたり2分～2分半。生徒たちは早速、班ごとに模造紙を広げ、細かな装飾や字句の追加などを始める。

取りかかると作業は早く、抜群の集中力・団結力を見せる生徒たち。早々に発表方法を煮詰めている班も多く、個々に発表する内容をノートにメモする生徒も見られる。

生徒たちが取り組んだテーマは、地球の一員としての自分を意識し、自ら見つけ出した課題。「地球温暖化」「食糧自給率」「学力低下」「少子化」「感染症」「世界の紛争」など、どれも一筋縄では行かないものばかりだ。

変わりゆく総合的な学習の時間。模造紙の仕上げをしながら、発表の仕方について話し合う。1年生と2年生は新バージョン、3年生は旧バージョンのカリキュラムとなっている。

生徒たちは興味あるテーマごとに2～5人の班を結成。テーマからウェビングで発想を広げ、ネットなどで調べ学習をし、それぞれにおける問題点やそもそもの原因、解決策などを探ってきた。先にテーマありきのスタイルは、生徒たちの課題意識を向上させるためのスパイスだ。

世界中が模索している、いわば正解のない難しいテーマに対して、生徒たちは班単位でどのような解決策を導き出したのか。また、個々人が今後さらに掘り下げていくテーマとして、どこに焦点を当てているのか。発表が待たれる。

「知」のアウトプットを苦手とする生徒たち

15分が過ぎたところで、原口先生は司会とタイムキーパー役を定め、発表に移るよう促す。緊張するトップバッターの選んだテーマは「森林減少による影響」。

「森林の減少によって特に大きな問題となっているのは、『二酸化炭素の増加』『地球温暖化』『海面上昇』といった一連の流れです」

「私が今後のテーマとして取り組むのは『動物が住む場所の減少』です。その理由は、たくさんの動植物が絶滅危惧種に指定され、絶滅の危機に瀕しているからです」

「私のテーマは『地下水の減少』です。なぜなら、熊本は地下水の豊富なところですが、最近になってその地下水の量が減ってきていると聞いたからです」

全12班、黒板に掲げるどの模造紙も、生徒たちの「まとめる力」を感じさせる仕上がりとなっている。だが、発表そのものについてはどうだろうか。

発表者は、伝えたい相手に対して体ごと視線を向けているか。声の音量は適切か。みんなが分かるように工夫しているか。話す内容は「自分の言葉」になっているか――。

発表時間は30秒～1分も余るほどに守られていた班がほとんど。しかし、どの班からも「何かを伝えたい」という気概があまり感じられない。視線は模造紙やノートに向かい、小さな声で読み上げるという班が目立つ。

また、聞く側の姿勢もなかなか整わない。発表の調整に手間取っている班もあるのか、ざわざわとした空気が鎮まらず、発表者はますます委縮してしまう。

「知」のアウトプットが苦手。石井校長の分析は、この授業からも感じ取れるものだった。

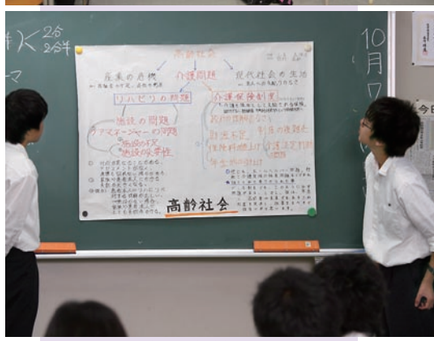
とは言え、限られた時間内で確実に成長が見られた点もある。

それは、発表者の所在なげな笑いの減少と、次第に築かれていった聞く側の受容的な空気。そして、いい発表にはしっかりと拍手で応えるという「相互評価」の姿勢だ。

実社会を生き抜くための基礎力をはぐくむ

担任の原口先生は、次のように話してくれた。

「まとめる内容も発表も、まだまだ物足りないレベルですし、指導する側も試行錯誤の連続です。それでも、生徒たちの課題意識や主体性の芽生えについては、少しずつ手応えを感じてきています」



いよいよ発表。12班が次々と前に出て、これまで取り組んできたテーマについて述べる。模造紙にまとめる力は感じられるものの……。

スタートしたばかりのこの取り組みに即効性はない。将来、生徒たちが色とりどりの花を咲かせ、たわわな実を成らせるために、栄養豊富な土壌を作る。それが総合的な学習の時間の役割だと原口先生。

話すことも聞くことも、他人と共に何かを成し遂げることも、社会に出れば当たり前の行為となる。今ここで鍛えているのは、生徒たちが未来を生き抜くための基礎力なのだ。また、他教科との連携も考えなければと原口先生は言う。

「今回、生徒たちが見いだしたテーマは、経済や紛争など地歴・公民科に寄ったものや、温暖化など理科的なもの、また医療や高齢化など保健にかかわるものと多様で、実際に私から他教科の先生に意見を伺う場面もありました。総合的な学習の時間と他教科との親和性は高く、いかに連携していくかは今後の課題ですね」

不安の闇を照らす確かな手応え

新たな取り組み。その役割や効能は理解できても、実際に生徒たちの成長を見なければ不安はぬぐいきれない。そう語るのは、これまで小論文の指導をしてきた岡本先生だ。

「昨年までの総合的な学習の時間、つまり小論文指導は、ワークブック中心の個々の学びでした。それが今年からは、自ら課題を見つけるところから始まり、グループ単位でその課題を掘り下げていくという活動を行っています。調べ、分析し、まとめ、表現していく段階で、生徒たちは本当に『書ける』ようになっているのか。正直不安だらけでした」

実績ある「これまで」を変える不安。そして「なぜ変えるのか」という反発。先が見えない状況に陥ることへの抵抗感も、当然あったと岡本先生は話す。

「しかし、現状でまとめている模造紙を見ると、予想以上にしっかり書けているんですね。課題意識を持って臨んでいることで、しっかりと自分の問題として取り組むことができているようです」

世の中には今こんな問題があるよと、その問題自体を教えていた昨年までから一転。若々しい感性で、世の中にはどんな問題があるのか意識することに始まる今年からの学びは、まさに案ずるより産むが易し。生徒たちに不足している力が浮き彫りとなる一方で、生徒たちの順応力の高さを感じた。

「ティーチャー」から「エデュケーター」へ

熊本二高の総合的な学習の時間。その変化の中枢にいるのが、県の内外を問わず、総合的な学習の時間をリードしてきた西先生だ。

「本校のこれまでの総合的な学習の時間は「teach」が主でした。これからは「educate」が主。教師はティーチャーではなく、エデュケーターとなって子どもたちにかかわっていく必要があります」

教え込むのではなく、子どもたちの力を引き出す。世の中がどんなに変化しても、楽しみながら柔軟に生きていく力を身に付けさせる。これが熊本二高の目指す総合的な学習の時間の姿だ。

「論文を書くテクニックはある。考えさせればしっかりと考えるし、探究的・協同的に学ぶ素地もある。でも、いざ論文を書かせてみると問題意識に乏しく、自分の意見を持てない。そうした子どもたちが世の中に出て、果たして必要とされる人材たりえるでしょうか」

西先生が見据えるのは3年後の高校の出口＝大学受験ではなく、50年後の「人間力」だ。「課題の設定」「情報の収集」「整理と分析」「まとめと表現」を繰り返し、スパイラルに上昇していく学び。いろいろな人と協力しあいながら課題解決へと導いていくその活動は、実社会とそのままリンクしている。

石井校長は言う。

「右肩上がりで伸びてきた進学実績の数字は、一時的にせよ停滞するかもしれません。ですが、生徒たちの未来を考えれば、今変えなければならない。一方、先生方も人間ですから、急激な変化を受け入れるには大変なパワーを要します」

総合的な学習の時間のプロフェッショナルである西先生の能力を引き出しながらも、他の先生がついて行けるスピード感を保ち、とにかく焦らず進めていくこと。これを徹底することで、教師間にも協同的な空気が生まれる。

「教師間の協同なくして、生徒間の協同も生まれません。どうか3年後、6年後の熊本二高を見てください。社会で生きる力を身に付け巣立っていく生徒たちの姿が、そこにはあるはずです」

原口直子（はらぐちなおこ）先生
1年5組担任・家庭科

岡本美保（おかもとみほ）先生
2年7組担任・国語科

西 泰弘（にしやすひろ）先生
2年5組（理数科）担任・理科